
天使の遊ぶ世界

亜稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の遊ぶ世界

【Nコード】

N3988X

【作者名】

亜稀

【あらすじ】

異世界を舞台に世界最強の人間(?)とその相棒である彼女が旅をするお話です。西へ東へ、自由気ままに世界を旅をし、騒動を巻き起こし、巻き込まれます。

性格以外はパーフェクトな彼。

何が何でも常識を手放せない彼女。

そんな2人の物語。(一応、主役は彼女です。そして、題名に天使が書いてありますが、実際には天使は出てきません)

プロローグ（前書き）

い
誤字脱字、ご意見、等ございましたら、遠慮なくご連絡ください

プロローグ

人間 対 竜^{ドラゴン}。

通常であるなら、その勝負の行方は明らかだ。

魔獣の代表格であるような竜^{ドラゴン}に普通の人間が勝てる訳がない。

しかしながら、その人間が普通の人間ではなかった場合、勝敗が変わる事もある。

戦う事に長けた人間——戦士や魔法使いであった場合、その腕前によつては勝つことも不可能ではない。

もっともそれは竜^{ドラゴン}の種類によつても言えることではあるが。

一口に竜^{ドラゴン}と言っても、ピンからキリまである。

中級に属するものなら個人での勝利は可能である。

過去にも、それなりの実例がある。

しかし、それが上級に属するものであるならば、個人での勝利は絶望的になる。

数人のパーティーを組み、少なくとも犠牲を出しながら、その果てに倒すことが可能になる。

こちらにもパーティーであるなら、いくつかの実例がある。

どちらにしても、竜^{ドラゴン}とは容易に倒せる相手ではなく、その打倒者は竜殺しと呼ばれ称えられる存在である。

どこぞのナレーションが彼女の頭を流れていく。

それは少なくともこの世界の常識であるし、真実と言ってもいい内容だ。

世間一般的には。

そう、それは世間一般的な話であって、彼女の認識には合わない。
より正確に言うなら、何事にも例外はつきものだと言う事だ。
と言うか、現在進行形で世界の常識は破壊されつつある。

人間 対 竜。ドラゴン

人間が無傷。
ドラゴン
竜が瀕死。

ちなみに、人間は男性1人だけ。
ドラゴン
竜は上級の下ぐらい。

世間の常識からいえば、間違った光景ではあったが彼女に驚きは
ない。

ただ、不条理感があるだけで。

ある意味、それさえも今更ではあるが。

彼女としても伊達で彼の相棒をしている訳ではない。

人間は慣れる生き物なのだ。

それどころか、それなりの年月一緒にいる事もあり、うっかりす
ると彼女の常識の方が書き換わりかねない。

いやいや、それはマズイ。

自分が常識を手放したら、誰が彼を止めてくれるのか？

それ故に、彼女は何が何でも常識を手放せない。

多分、彼女が常識を手放したら、終わる。

何とは言えないが、何かが終わる。

それから数分後。

勝負はついた。

結果？

言うまでもなく、彼の完全勝利である。

さらに付け加えるなら、かすり傷程度しか負っていない。

何かが間違っている。

彼女の名はローザ・イルルシュターニ。

彼の名はミカエル・ローシェリア。

これは限りなく最強に近いミカエルとその相棒ローザの物語である。

プロローグ（後書き）

連載始めてしまいました。

行き当たりばったりの連載ですが、どうぞお楽しみください。

第1話 依頼達成です

時刻は夕方。

まだ日が暮れはしないが、通りは賑やかに人が行き来する。

家路に急ぐ者もあれば、酒場に向かう者もいる。

ご飯時と言う事もあって、通りの両脇の露店では様々軽食も売られている。

何らかの肉をシンプルに炙ったもの。味付けは塩・胡椒か甘辛いソースか。

薄いパンの間に野菜を炒めた物や肉を挟んだもの。

魚の切り身を油でカラッと揚げたもの。

肉と野菜を串にさして焼いたもの。

甘い焼き菓子の類も多く売られている。

そんな人混みの中、彼女たちの前には綺麗に道が出来ていた。

いや、正確に言うなら、彼の前には。

それはもう、魔獣か魔族にでも出会ったかのように、人が硬直し、飛び退く。

便利ではある。

無言でいつも通り面白くなさそうな顔で歩いている彼の内心は知らないが、彼女としては楽でいいと思ってしまう。

と言うか、思わないとやってられない。

向けられる視線にも思うところがないわけではないが、慣れた。

誰が何と言おうと、慣れた。

いちいち気にしては生きていけない。

彼——ミカエルの相棒になってから、彼女——ローザの神経は確実に凶太くなっただろう。

「鬱陶しい」

ドアを開けた瞬間から、2人に視線が突き刺さる。

はつきりと不機嫌なミカエルのセリフはローザの内心と被った。
が、ローザにはそれを口に出さないだけの常識があった。

ミカエルが口に出しているので無駄と言えは無駄な常識ではあるが。

「なら、さっさと用件を済ませて宿に行きましょう」

と言うか、そうしたい。

無言で肯定を示すミカエルとともにギルドのカウンターへ向かう。

ここ冒険者ギルドでは様々な仕事を持ち込まれ、請け負われている。
く。

仕事は難易度によってランク分けされており、請け負う人間も当然のことながらランク分けされている。

まあ、細かい事は各ギルドの責任者に一任されているので、その
ランク分けが絶対という訳でもないが。

ランクは上からSS・S・A・Bと続き、一番下はHとなっている。
る。

Hはギルドに登録したての初心者で、SSは世界に名声が轟くような腕前の持ち主。

そして、このミカエルは世界に3人しかいないSSランクに属し

ていたりする。

彼の相棒であるローザはAランク。

もっともミカエルとパーティーを組み、生きているだけでランクが上がったので、ローザ自身にその辺の自覚は皆無だったりする。周りのローザに対する認識も、概ねそんなものだ。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件でしょう」

にっこりと愛想よく決まり文句を口にする受付嬢。

ちよっぴり頬が引きつっているだけ、と言うのは十分賞賛に値する。

過去には急に泣き出したお嬢さんもいた。

どうも話を聞くに、鋭い雰囲気と目が非常に恐怖をあおり、全身から近寄るなど言うオーラが出ているらしい。

………同意しないでもない。

しかしながらちよっと考えてほしい。

ミカエルが不機嫌そうな顔をしているよりも、笑っている方が怖いと思うのだが？

絶対に、善からぬ事をたくらんでいるに違いない。偏見だと言われようと、そう断言できる。

「依頼達成の報告にきました」

「ミカエル様とローザ様ですね。依頼を確認しますので、少々お待ちください」

対応に出たのがローザだったので、受付嬢は安心したようだ。

そこまであからさまではない受付嬢の対応に、ミカエルも眉間のしわだけで済んでいる。

「……………はっ？ えーっと、竜退治？…ですか？」

「そうです」

「お二人で？」

「ええ」

「依頼達成？」

「これが竜の逆鱗です。確認してください」

半ば呆然としながらも、確認作業を続けられたのは素晴らしい。

そんなプロ根性にあふれる受付嬢でも、受け入れられる事と受け入れられない事があるようだ。

と言うか、普通はある。

吃驚して、魂が半分くらい出てしまっているらしい。

ローザが竜の逆鱗を受付嬢の手に乗せる。

逆鱗と言うのは当然ながら生きた竜から取れる物ではない。魔力の源になっているため、触れるだけでも怒り狂う。その逆鱗を持っていると言う事は、竜退治に成功したという何よりの証。

と言うか、サイズがサイズなので死体を持つてくることは普通無理だ。

まあ、普通は。

ローザの場合は空間魔法が使えるので、そこに死体をそのまま放り込んであるのだが。

文句があるなら——ないと思うが、死体を取り出して見せてもいい。

「もしもし？」

「驚かすか？」

「って、待って、ストップ。

何で剣に手をかけてるの？」

先ほどの眩きと、手のかけられた剣。

予想は難しくない。

「取り敢えず、その辺の物でも斬ったら気が付くだろう」

「気が付きません」

きっぱりと言っておく。

それ、絶対にさらに意識が飛ぶから。

それ以前に、問題なく片付くとも思えない。

「では、その辺のを2・3人斬るか？」

「却下」

悪化している。

間違はなく悪化している。

そんな簡単に人死に出さなくてもraithたい。

そんなに難しい話ではないはずなのに、なぜミカエルにかかると難易度が跳ね上がるのか？

ローザにはつくづく謎だった。

第1話 依頼達成です（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
誤字脱字がありましたら、ご連絡ください

第2話 ケンカを買いましょう

「2人だけで竜退治なんて嘘くせえー」
「どうせ何か裏があるんじゃないの？」

そう言っただけで嗤うゴロツキ、よりは若干真面な格好の2人組。
ランクは高くてもE。
中身は下種。
そして、命のいらない大馬鹿者。

ローザは心中できっぱりと断じる。
ついでに、一応、冥福も祈っておく。
なぜ自ら死地に飛び込むのか？
よくある事ながら、ローザには本気で謎だった。
そんな解答の出ない事を考える前に、今後のあれこれを考えるべきかもしれないが。

ざっとギルド内を見まわして確認。
ギルド員が5名、冒険者が4名、依頼人の姿はなし。
保護対象はギルド員だけで大丈夫なようだ。

他の冒険者は仮にも冒険者をしているのだから、判断を誤らずに逃げる事くらいできるだろう。
そう信じる事しておく。

「全能の盾」
シールド

ローザが魔法を発動すると同時に空気を斬る音がする。
ぎりぎりセーフ。

生じたであろう砂埃も衝撃も、全て魔術で作られた不可視の盾が防いでくれる。

魔術の素早い発動は、日頃の成果としか言いようがない。
きちんとギルド員も盾の領域内に庇えた。

「ミカエルがご迷惑をおかけいたします」

にっこり笑顔で謝罪する。

と言うか、笑うしかない。

色々思うところはあるが、全て無駄でしかない。

状況についていけないのか、5人は無反応だ。

よくなった視界やあんまり耳にしない悲鳴が聞こえてきた段階で、ようやくこのギルドの責任者が反応を示した。

「こちらこそ、助けていただいたようで」

「いえいえ、当然の事です」

むしろ感謝される方が、良心が痛む。

現在進行形で建物は壊れていつているのだし。

犯人は相棒なのだし。

こちらが謝るべきだ、どう考えても。

「あの…」

「はい？」

「これ、魔術ですよね？」

意外に早い復活を遂げた受付嬢が、見えない盾を指さす。

「ええ、魔術です」

「シールド全能の盾ですよね？」

「そうです」

「……………大丈夫ですか？」

恐る恐る、といった様子で聞かれる。

数回瞬きし、しばし考える。

質問の意図がよく分からない。

そんなローザの様子にギルドの責任者が助け舟を出してくれる。

「この魔術はかなり魔力を消費するはずですが、流石はランクAですな」

「そうです。普通なら発動時間は数秒、って聞きます」

ようやく分かった。

ローザが使っている魔術、シールド全能の盾。

あっさり使っている割には高度な魔術であり、恐ろしく魔力を消費する。

しかしそれに見合う効果があり、ほぼ全ての害悪から身を守ってくれる。効果領域は基本的に術者の周り。より魔力を消費するが、効果領域を広げる事も可能である。

デメリットはやはり消費される魔力が大きい事。よって、いかにタイミングよく、攻撃を受ける瞬間のみに魔術を発動するかがキーになってくる。

その魔術を結構な領域で、現在も使用中。
並みの魔法使いならとくに魔力が切れていてもおかしくない。

「これくらいできないと死んでますから」

「……………」

「……………」

謙遜でも誇張でもない。

事実である。

今の状況からしても分かる通り、ミカエルは周りの事を考えてくれない。

攻撃範囲にローザが入っていても、普通に攻撃する。

巻き添えとかも考えない。

ミカエルの相棒に必要なものは、何をおいても自分の身を守る事である。

攻撃力はミカエルが過剰なほどに持っているので、なくても大丈夫。

と言うか、相棒いらないんじゃないの？

「一日くらいなら魔術維持できますから、安心して下さいね」

「……………はい」

この状況、ローザとミカエルしか笑えない。

この冒険者ギルド、フォルスト神聖王国、王都支部の責任者——
クライブ・カーンはローザの評価を改める。

ランクSSの魔王・ミカエルの相棒は、それだけの実力が十分にある。

そうして、ミカエルの評価も改める。

噂は噂ではなく、まだまだ甘いと。

全員見ないし、耳に入れないようにしているものに、そう改めざるを得ない。

異名の魔王は伊達ではないのだ。

「ああ、それと壊れた建物は時間魔術で直しますから」

どこかズレた、現実的かつ建設的な言葉。

悲鳴が聞こえなくなり、魔術を解除するまで、ローザは笑顔で押し通した。

引きつっていようと何だろうと、笑顔じゃなくなったら終わりな気がしたのだ。

何しろ、よくある事なのだから。

今回は当事者にしか被害がないので、マシな方だ。

ある意味ケンカなので警備兵に拘束されることもないだろう……
多分。

相手が死亡していても自己責任の範囲内……のはずだ。

それ以前にミカエルを牢に放り込める存在がいるとも思えない。

そんな事を考えながら、彼女は異名の大天使に相応しい笑顔を浮かべ続けた。

ランクSSの魔王・ミカエル。
ランクAの大天使・ローザ。

2人のフォルスト神聖王国での冒険は、ある意味、非常にらしく滑り出したのだった。

第3話 現在地の確認

国はフォルスト神聖王国。

その王都ネルイ。

その中心部からやや離れた所に、それはあった。

冒険者ギルド直営の宿。

冒険者ギルド直営の宿、と言うのは、そう珍しい物ではない。

ちよっと大きな都市になら、必ずと言っていいほど存在している。値段は少しばかり割高ではあるが、防犯や情報収集と言った面から考えれば、決して割に合わないものではない。

むしろ、重要な仕事の最中などにはなくてはならないものだ。なにしろ宿の従業員全員が何らかの武術や魔術に通じており、ある種の治外法権さえ持っている。

つまり、ここで問題を起こす馬鹿は皆無と言っていい。

むしろ問題を起こすのは、真正の馬鹿だけである。

今日初めてネルイを訪れたローザとミカエルだが、以前いたミュレイ王国の貿易都市シズマでもギルド直営の宿に泊まっていた。

と言うか、それ以外の宿に泊まるのは、本人達はもちろん、他の宿泊客にとっても迷惑以外の何物でもない。

ギルド直営以外の宿に泊まると、必ずと言っていいほど、何かがある。

恨みをかっているどっかからの襲撃とか。

仕事の妨害工作だとか。

ミカエルの女性関係の揉め事だとか。

最後のは自業自得だとしても、2人とも微妙どころではなく、かなり恨みはかっている。

怨恨ではなくても、それぞれ事情があったりもする。

そう、いろいろあるのだ。

本当に、嫌になるほど。

そんな訳で、ギルド直営の宿があるなら、そこに泊まると決めていた。

場所も冒険者ギルドで聞いておいた。

宿の名前は『気まぐれな悪魔の館』。

はつきり言おう。

その名前を聞いただけで、何か予想がついた。

嫌な予感とか、そういったものの前に、そもそも聞き覚えがある名前だ。

シズマでの宿の名前が『気まぐれな悪魔の館』。

同じ名前である。

そして、たどり着いた宿の外観も、記憶にあるものと同じだった。名前にちなんでか、所々蔦に覆われた壁。

屋根は黒とも群青ともつかぬ寒色。

窓ガラスは特注の曇りがかったもの。

多分、きつと、ちよつとしたキズさえも記憶にあるものと同じなのだろう。

「暇な奴だな」

「わざわざ転移させたんですね」

ミカエルもローザもどんよりした口調になってしまう。

いや、むしろ感心すべきなのか。

シズマからネルイに宿を転移するという、大がかりな魔術を使った事に。

そもそも空間魔術は高度な部類に入る。

代表的な空間移動テレポートは魔術の消費が大きく、せいぜい2・3人移動できれば大したものだ。

それを人間ではなく建物に応用するというのは、中々に大変だ。

対象が生物ではない分、生命維持に関する面では難しくない。

しかし、対象が大きい分、半端なく魔力を消費する。さらに、移動する場所に関して、恐ろしく精密さを要求される。

少なくとも建物の転移など、ローザはやりたくない。

やって出来ない事はないが、やりたいとは思わない。

そして、予想しながら開けたドアの中には、これまた予想通りの面々がそろっていた。

どっかで見た事のある店主に従業員。

どっかで見た事のあるパーティー。

「ミカエル、ここってネルイですよね？」

ローザの目は真剣だ。

都市どころか、国さえ移動したというのに、顔ぶれが変わらない
というのはどうしたものなのか？

「諦めろ。」

奴は10人ぐらい分身がいるという噂だからな」

きっぱりと断言する。

神出鬼没で10人の分身を持つ——と噂されているのは、この
宿の主人だ。

本気で違う大陸で同時刻に目撃情報があつたらしい。
らしい、と言う噂なのだが、本人を知る全員が全員、そんな事も
あると納得してしまう。

宿の主人——フェルディナンド・ヒノ。

どっからどう見ても20代半ばの外見で、自己申告50歳。
穏やかな笑顔の好青年。

その実、お腹真っ黒。

多分、本来ならシズマどころか冒険者ギルド本部にいたくはな
らないフェルディナンド。

彼はいつもの通りの笑顔で、ローザとミカエルを宿に迎えるのだ
った。

「いらっしやいませ。『気まぐれな悪魔の館』へ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988x/>

天使の遊ぶ世界

2011年11月6日01時17分発行